

役員名簿

理事・監事

(令和2年7月1日現在)

役職名	氏名	所属
理事長	百島 則幸	理学博士 九州大学名誉教授(放射化学)
副理事長	島岡 隆行	工学博士 九州大学大学院工学研究院教授(環境システム工学・廃棄物工学)
副理事長	吉留 総	前福岡県環境部長
業務執行理事	仲島 賢	当協会事業本部長兼総務部長
理事	出光 一哉	工学博士 九州大学大学院工学研究院教授(原子力)
理事	江口 洋之	九州電力株式会社 ビジネスソリューション統括本部 地域共生本部(環境)部長
理事	大上 和敏	理学博士 大分大学教育学部教授(地球化学)
理事	勢一 智子	西南学院大学法学部教授(環境法学)
理事	関根 雅彦	工学博士 山口大学大学院創成科学研究科教授(衛生工学・環境工学)
理事	二渡 了	工学博士 北九州市立大学国際環境工学部教授(環境工学・環境管理学)
理事	山口 敦子	農学博士 長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授(魚類学・水産資源学)
監事	甲能 市郎	甲能公認会計士事務所 所長
監事	田中 和教	株式会社ふくおかフィナンシャルグループ 取締役監査等委員

評議員・顧問

役職名	氏名	所属
評議員(会長)	浅野 直人	福岡大学名誉教授 元当協会理事(法学・環境学)
評議員	篠原 雅道	九州電力株式会社 原子力発電本部 原子力管理部長
評議員	芝原 雅彦	理学博士 大分大学理工学部教授(有機化学)
評議員	下東 康幸	理学博士 九州大学名誉教授(生化学)
評議員	杉原 真司	理学博士 九州大学アイソトープ統合安全管理センター准教授(放射化学)
評議員	薛 孝夫	農学博士 元九州大学大学院農学研究科准教授(保全生態学)
評議員	田中 昭代	医学博士 九州大学大学院医学研究院講師(環境医学)
評議員	松藤 康司	工学博士 福岡大学名誉教授(衛生工学・廃棄物工学・環境微生物)
評議員	弓削 こずえ	農学博士 佐賀大学農学部准教授(灌漑工学・利水工学)
技術顧問	石橋 健二	工学博士 元九州大学大学院工学研究院教授(放射線計測学・原子力学)
技術顧問	内田 唯史	工学博士 元当協会副理事長(環境工学)
技術顧問	川野 田實夫	大分大学名誉教授 元当協会副理事長(環境科学)
技術顧問	松岡 信明	理学博士 元当協会副理事長(放射化学)
技術顧問	持田 勲	工学博士 九州大学名誉教授 前当協会理事長(材料化学・プロセス工学)

技術諮問委員

役職名	氏名	所属
技術諮問委員	穴井 謙	工学博士 福岡大学工学部教授(騒音)
技術諮問委員	宇野 誠一	水産学博士 鹿児島大学水産学部教授(環境毒性学・環境化学)
技術諮問委員	岡島 敏浩	理学博士 公益財団法人科学技術交流財団あいちシンクロトロン光センター主席研究員(放射光物性科学)
技術諮問委員	清崎 淳子	理学博士 公益社団法人日本技術士会 理事(地球科学・地熱地質学・防災)
技術諮問委員	久場 隆広	工学博士 九州大学大学院工学研究院教授(環境工学)
技術諮問委員	小出 秀雄	経済学博士 西南学院大学経済学部教授(環境経済学)
技術諮問委員	Sergei Y. Tolmachev	U. S. Transuranium and Uranium Registries, College of Pharmacy and Pharmaceutical Sciences, Washington State University 理学博士 米国ワシントン州立大学教授(保健物理・放射化学)
技術諮問委員	久留 百合子	株式会社ビスネット 代表取締役
技術諮問委員	広城 吉成	工学博士 九州大学大学院工学研究院准教授(地下水環境学・上水道工学)
技術諮問委員	逸見 泰久	理学博士 熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター教授(動物生態学)
技術諮問委員	矢野 真一郎	工学博士 九州大学大学院工学研究院教授(環境水理学)

編集後記

本号の編集を担当しました東京事務所長の松崎です。このたびは「環境管理」(第49号)をお読みいただき、ありがとうございます。

今年は、世界的に新型コロナウイルスの影響が広がり、身近な取組みとして、テレワークやソーシャルディスタンスの確保などの感染症対策が行われました。また、海外からの人の移動だけでなく、国内であっても県境をまたぐ移動の自粛が行われました。様々な人の集まるイベントが中止となり、その中でも東京オリンピックが来年に延期されたことは、コロナ禍当初には、想像できないような出来事でした。さらに、多くの方がお亡くなりになり、著名な方々も含まれたことで新型コロナウイルス感染症の怖さを強く印象付けることになりました。この場をお借りして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

一方で環境に関しては、海外の研究機関の発表として、今回の新型コロナウイルス感染症対策の活動自粛で、二酸化炭素排出量が昨年比17%削減されたと新聞等で報道されました。さらに、年間の総排出量でも8%削減されるとのことです。地球温暖化対策には、社会システムの転換が必要と何十年も前から言われてきましたが、計らずとも世界的に体験することになりました。第二波も懸念されますが、新型コロナウイルス対策後の世界が変わると予感させる出来事でした。

本号「巻頭言」には、九州大学の矢原徹一先生にご執筆いただきました。コロナ禍中において、人間社会で生じるさまざまな問題に二者択一の解決策はなく、知識を得て複数の解決策を模索する重要性を感じました。

「特別寄稿論文」として、マリンワールド海の中道の中村雅之館長には、絶滅危惧種を守り、増やすことを目的とした「生息域外保全」として、国営海の中道海浜公園の自然環境を利用した人工ため池を造成したほか、学生による生育観察の場として活用事例を紹介いただきました。

福岡女子大学名誉教授の藤岡祐一先生には、2050年までに温室効果ガス排出量80%削減に向けた社会イノベーションについて各種条件を想定し達成に向け

た対策とその効果を考察いただきました。目標達成のために使用するエネルギーをすべて再生可能エネルギーに転換する事や、社会システムを変えるような省エネを行う必要があるそうです。今回のコロナ禍の社会情勢と重なったように思えます。

公益財団法人科学技術交流財団あいちシンクロトン光センターの岡島敏浩先生には、現在お勤めの愛知シンクロトン光センターと昨年までお勤めになっていたSAGA-LS(佐賀県鳥栖市)の特徴を紹介いただきました。また、施設管理の課題についても考察いただきました。

「研究報告」では、技術部の常深研究員が地下水等の汚染として問題視されているPFOS(パーフルオロオクタンスルホン酸)とPFOA(パーフルオロオクタン酸)の液体クロマトグラフ質量分析計(LC-MS/MS)による分析法の検討を行いました。

同部の長谷美係長は、法令に基づく振動対策を施していたとしても住民からの苦情が発生することを、有感と無感の体感で考察しました。

また、環境部の山津研究員ほか2名は、ノリ養殖場への下水処理水による栄養塩供給の効果を現地調査及びノリの生育状況をもとに考察しました。

「業務紹介」として、環境部大井主席研究員から次世代シーケンサーを用いた環境DNA調査の事例と、同部の城内係長から魚類の耳石分析(日齢査定、微量元素分析)について紹介させていただきました。共に今話題の技術です。

「公益活動報告」として、「第2回九環協オープンデー」の開催と、公益活動推進センターの活動報告を大城戸係長から報告いたしました。

「いいか放談」では、当協会前理事長で技術顧問の持田勲先生に、エネルギーに関する過去・現在と今後の社会情勢と展望についてお書きいただきました。

お陰様で本号も世情を反映した内容豊富な冊子に出来上がりました。お忙しい中ご寄稿いただいた先生方に、あらためて感謝申し上げます。